

# 〈返り点Ⅱベクトル理論〉の試み

— 返り点は合理的に説明できるか? —

古田島洋介\*

## 一 基本的概念

数学にとんと通ぜぬ身でも、ベクトル<sup>(1)</sup>が大きさ<sup>(2)</sup>と方向を持つ有向線分として表現されることくらゐはわきまへてゐる。となれば、漢文訓読において、小返り(レ点)および大返り(一二点・上下点・甲乙点・天地人点)と呼ばれる大きさを備へ、かつ、漢文の文字列に対して下から上へと逆方向に進むことを指示する返り点も一種のベクトルとして捉へられるはずだ。あまりに初歩的で幼稚な発想かもしれないが、一度は考察してみても無駄ではなからう。たとひ素人の複雑な思ひつきにすぎずとも、いづれ玄人すなはち数学の専門家の目にとまれば、洗練された理論へと生まれ変わる僥倖に恵まれぬともかぎるまい。茲に敢へて暴虎馮河の勇を奮ふゆゑである。

ベクトルを考へる以上、まづはベクトルが存在する領域、つまりベクトル空間またはベクトル場を設定せねばならない。ただし、素人の哀しさ、「ベクトル空間の係数体の元をスカラーという」だの「三次元ユークリッド空間において、ある領域 $D$ で定義され、その値がベクトルで表わされる関数(数式省略)を $D$ におけるベクトル場という」だのと説明されても、残念ながら受けとめるべき素養ナシ、何のことやらさっぱり理解できずじまひである。とはいへ、返り点をベクトルとして把握するには、二つの一次元すなはち二本の直線を考へ、漢文の文字列の左右それぞれに一本づつ措定すれば事足りるだらう。ここでは仮に右の直線を順行(本位)ベクトル領域と呼び、左の直線を逆行(臨時)ベクトル領域と名づける。順行・逆行は、漢文の文字列を閲読するさいの方向を念頭に置いての命名にほかならない。別称の本位・臨時は、漢文の文字列を閲読するに当たつての本来の順序および返り点によつて要求される臨時の順序の謂<sup>(い)</sup>である。本稿の出発点たる基礎的な概念なので、具体例を以て確認しておかう。

国破山河在 国破れて山河在り  
城春草木深 城春にして草木深し

\*〔唐〕杜甫「春望」五律・首聯

一瞥してわかるとほり、二句とも返り点がない。上から下へと一字づつ読み下るだけである。したがつて、このやうな詩句には、左のごとく暗黙裡に順行(本位)ベクトルが作用してゐると考へられるだらう。

↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
国破山河在

↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
城春草木深

各ベクトルの起点・終点は、各々の漢字の中心点、つまり原稿用紙で言へば各マス目の中心の高さにあるものと看做す。そして、任意の漢字の中心点から直後の漢字の中心点までの距離を1とすれば、順行ベクトルは絶対値1のベクトルを単位元と定めることができる。右のやうに返り点の一つもなければ、漢文は順行単位元ベクトルに従って本来の順序どほり一字づつ上から下へと読んでゆくわけだ。

## 二 レ点の処理

では、返り点が掛かった場合は、どう考へればよいだらうか。まづはレ点について観察してみよう。

感<sub>レ</sub>時花<sub>レ</sub>濺<sub>レ</sub>涙  
恨<sub>レ</sub>別鳥<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>心  
時<sub>とき</sub>に<sub>かん</sub>感<sub>かん</sub>じては<sub>はな</sub>花<sub>な</sub>にも<sub>なみだ</sub>涙<sub>なみだ</sub>を<sub>そそ</sub>濺<sub>そそ</sub>ぎ  
別<sub>わか</sub>れを<sub>うら</sub>恨<sub>うら</sub>んでは<sub>う</sub>鳥<sub>こ</sub>にも<sub>こころ</sub>心<sub>こころ</sub>を<sub>おどろ</sub>驚<sub>おどろ</sub>かす

\*〔唐〕杜甫「同右」詩・頷聯

レ点は、連続した二字の上下を転倒させる機能を持つ。となれば、「感時・濺涙／恨別・驚心」それぞれに逆行（臨時）ベクトルが作用してゐると看做せばよい。ただし、小返りのレ点は絶対値1のベクトルだが、順行ベクトルとは異なり、これを逆行ベクトルの単位元と看做すの

は無理だらう。大返りの一二点・上下点……などが現れると、単位元の足し算では事が収まらなくなるからである（後述）。

↑ ↑ ↑ ↑ ↑  
感<sub>レ</sub>時花<sub>レ</sub>濺<sub>レ</sub>涙  
↑ ↑ ↑ ↑ ↑  
恨<sub>レ</sub>別鳥<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>心

ここで問題になるのは、「感」の次に「花」を、「恨」の次に「鳥」を読むことが如何なる作用によつて保証されるのかといふことだ。差し当たり二つの考へ方が可能だらう。

第一の考へは、それぞれ順行ベクトルによつて「感」から「花」へ、「恨」から「鳥」へ跳ぶとする捉へ方である。些少とも漢文訓読に慣れてゐれば、おそらく最も素朴な実感に近い捉へ方だらう。論点の三字づつだけ取り出せば――

↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
感<sub>レ</sub>時<sub>とき</sub>花<sub>な</sub>  
↑ ↑ ↑ ↑ ↑  
恨<sub>レ</sub>別<sub>わか</sub>鳥<sub>こ</sub>

けれども、このやうに看做すと、二つの点で不都合が生じてしまふ。一つは、「感」から「花」へ、「恨」から「鳥」へと進む絶対値2の順行ベクトルがどこから生ずるのかといふ疑問である。前<sub>まへ</sub>に見たごとく、順行ベクトルは絶対値1のはずだ。これを加算して絶対値2とする理由が



右のごとく考へれば、順行ベクトルは絶対値1の単位元を設定するだけで片が付き、潜在してゐる順行ベクトルよりも、顕在してゐる逆行ベクトルのはうを優先して読むことも説明できるだらう。言ふまでもなく、潜在してゐるようが顕在してゐるようが、常に順行ベクトルが存在してゐる以上、漢文には絶えず上から下へと読んでゆく推進力が掛かつてゐるのである。

### 三 一二点の処理

今度は一二点について考へてみよう。果たしてレ点の場合と同じ手が通用するだらうか。

烽火連ほくわ三月さんげつ  
家書抵かしょ二万金ばんきん

烽火ほくわ三月さんげつに連つらなり  
家書かしょ二万金ばんきんに抵あたる

\*〔唐〕杜甫「同右」詩・頸聯

順行ベクトルに従つて「烽火／家書」を、次いで「三月／万金」を読み、逆行ベクトルによつて「月／金」から「連／抵」へ返すことになる。レ点の場合と同じやうに考へれば、左のごとくベクトルが付けられるはずだ。

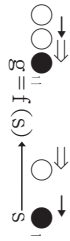
烽火連ほくわ三月さんげつ  
家書抵かしょ二万金ばんきん

各句頭の「烽火／家書」を順行ベクトルそのままに訓ずるのは自明であらう。いづれも逆行ベクトルの作用を受けてゐないからだ。けれども、「連／抵」を跳び越える点には疑問符が附く。「連」にも「抵」にも逆行ベクトルが掛かつてゐる以上、そして、「連／抵」から「三／万」への順行ベクトルが虚である以上、第二節の考へ方を踏襲すると、先に逆行ベクトルに従つて「月／金」から「連／抵」にもどり、それから「三／万」だけを読むといふ奇妙な結果になつてしまふのである。この不都合を解消するには、どのやうに考へればよいだらうか。

レ点は、常に絶対値1のベクトルを表し、一つの符号で連続した二字の転倒を、つまり直下の字から直上の字へと返ることを表す。要するにレ点一つで起点と終点の双方を表すことができるわけだ。しかし、一二点は違ふ。起点に「一」を、終点に「二」を付けねばならない。起点・終点それぞれに符号が必要なのである。起点「一」がなければ終点「二」は意味を成さず、逆に、終点「二」がなければ起点「一」も無意味となる。さうだとすれば、「烽火／家書」の次に、「二」点の附いた「連／抵」を跳び越える理由も納得できるだらう。「連／抵」に見える「二」点は、「月／金」に附いた「一」点があればこそ初めて意味を持つからだ。「月／金」を訓ずることなく「連／抵」に進むことはあり得ない。「烽火／家書」を読み終へたならば、終点たる「二」点の附いた「連／抵」は暫く跳び越え、順行ベクトルの押し下げ圧力によつて、起点たる「一」点にたどりつくまで下方へと読み下すこととなる。むろん、本例では「三月／万金」の順行ベクトルが「一」点への到達を保証してゐるわけだ。

一二点を念頭に置きつつ、右を一般化してみよう。まづは返り点の起

点を  $s$  (start) 、終点を  $g$  (goal) と置く。終点  $g$  は起点  $s$  が定まつてこそ意味を持つのであるから、一種の関数と看做して  $g=f(s)$  と書けるだらう。起点  $s$  が定まらないうちは、 $s \parallel \phi$  すなはち  $g \parallel \phi$  と考へれば、 $g$  を跳び越す理由になるはずだ。 $g \parallel \phi$  が成り立つ以上、起点  $s$  が未定であれば終点  $g$  の漢字は暫く消失してゐるものと仮定することもできるが、消失してゐた終点  $g$  の漢字が起点  $s$  が定まるのを待つて改めて出現すると考へるのは、いささか面倒な手続きなので、今は採らない。ここでは  $g$  を単に跳び越える字と捉へ、便宜上、一二点が作用する字は ● で表しておく。



返り点付きの漢文を読むとき、しばしば「まづは返り点の附いてゐない漢字を読み、返り点に出逢つたら、返り点に従つて上に返して読む」といふ要領が説かれるが、「返り点の附いてゐない漢字を読む」んでゐながら「返り点に出逢つたら」と仮定するのは矛盾ではあるまいか。また、「二」点といふ歴とした返り点に出逢つてゐるのに、そこから返ることなく、下方の「一」点から返り読みが始まるのも何やら腑に落ちない話であらう。このやうな矛盾を孕んだ曖昧な説明を繰り返してゐるから、漢文は嫌がられるのである。

右のごとく順行・逆行のベクトルを措定し、終点  $g$  に当たる漢字は起点  $s$  が未定ゆゑに跳び越えたと考へるはうが遥かに明確な説明だと思ふのだが、果たして如何であらうか。また、一二点の指示する逆行ベクトルが絶対値 2 以上となることは、一二点の用法からして自明である。

決して「一」点から一字づつ遡つて「二」点にたどりつくわけではない。前に「大返りの一二点・上下点……などが現れると、単位元の足し算では事が収まらなくなる」と記した理由も右の例から明らかだらう。

なほ、实例として〔唐〕杜甫の五律「春望」を頸聯まで取り上げたので、行きがかり上、最後の二句にもベクトルによる説明を加へておかう。

白頭搔更短  
 渾欲不勝簪

はくとうか 白頭搔けば更に短く  
おん 渾て簪に勝へざらんと欲す

\*〔唐〕杜甫「同右」詩・尾聯

両句ともベクトルによる処理は容易そのものだらう。前句は順行の単位ベクトルのみ、後句はレ点についてだけ逆行ベクトルを措定すればよい。

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
 白頭搔更短  
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
 渾欲不勝簪

#### 四 上下点の処理

次は上下点である。大返りに関しては、一二点さへ捌ければ、上下点・甲乙点なども同様に考へてよいはずだが、念のため上下点についてだけ確認しておかう。小出しにするのを避け、いきなり上・中・下の三者が揃つて現れる漢文を扱ふことにする。やはり漢詩の字句を素材とし

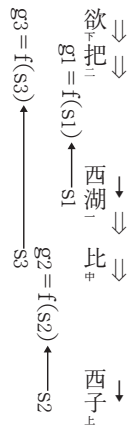
てみよう。

欲<sub>下</sub>把<sub>二</sub>西湖<sub>一</sub>比<sub>中</sub>西子<sub>上</sub> 西湖<sub>二</sub>を把<sub>つて</sub>西子<sub>一</sub>に比<sub>せんと</sub>欲<sub>す</sub><sup>(3)</sup>

\*〔宋〕蘇軾「飲湖上初晴後雨」二首ノ一・七絶・転句

この蘇軾の七絶は、起句・承句そして結句については一つも返り点を附ける必要がない。いづれも順行ベクトルを考へるだけで事が済む<sup>(4)</sup>。だからといふわけではないが、右に掲げた転句に限つては、おそらく詩句として最も複雑な返り点が要求される。結句「淡粧濃抹総相宜」(淡粧濃抹総て相宜し)と相俟つて、巧みな比喻で名高い詩句であるが、返り点が入り組んだ一句としても記憶に値するだらう。一つの詩句に上・中・下の三者が現れるのは珍しい。

右の一句にベクトルを措定するには、中継点となる「中」点の扱ひさへ確定すればよいはずだ。もつとも、中継点だからとの理由で、新たな考へ方を導入するのは避けたい。当てはめるべき法則は、少なければ少ないほど好ましいからである。そこで些少の考へを廻らせば、中継点と言ひ条、「中」点は「上」点に対しては終点となり、「下」点に対しては起点となつてゐるものと看做せる。つまり、第三節で持ち出した起点・終点の考へ方をそのまま適用すればよい。上中下点が附いてゐる以上、当然その内部に二点も掛かつてゐるので、書き込みはごちゃごちゃつくことになるが、示してゐる内容それ自体は第三節で述べた趣旨と同じである。作図の便宜上、左傍に三本の直線を想定しておく。



念のため考へ方を記しておけば——冒頭「欲<sub>下</sub>」「把<sub>二</sub>」は、それぞれ終点なので跳び越える。順行ベクトルに従つて「西湖<sub>一</sub>」を読み、起点「湖<sub>一</sub>」から逆行ベクトルによつて終点「把<sub>二</sub>」に返す。次いで潜在してゐる順行ベクトルに沿つて下方に向かふが、「比<sub>中</sub>」は終点ゆゑに跳び越す。そして、順行ベクトルどほり「西子<sub>上</sub>」を読み、起点「子<sub>上</sub>」から終点「比<sub>中</sub>」に返し、さらに、その「比<sub>中</sub>」を改めて起点とし、終点「欲<sub>下</sub>」に返す。——かう考へれば、どのやうな順序で訓読するかが明確に説明できるのではなからうか。少なくとも「一二点と上下点があるときは、先に一二点の部分処理し、次に上下点の部分処理する」などといふ粗雑な説明よりはましだらう。

心得ておくべき実用上の要領は、①漢文には、陰に陽に絶えず順行ベクトルによる上から下への圧力が掛かつてゐること、②返り点の終点に当たる漢字は、起点に当たる漢字を読まないうちは跳び越えておくこと——の二点である。

## 五 連読符号の処理 (1) 二字句

さて、次いで考察しておくべきは、連読符号<sup>ハイフン</sup>の問題だ。連読符号に戸惑ふ学生は少なくない。返り点をきちんと附けられる学生でも、連読符号がらみになつたとたんに変調を来たし、わけのわからぬ返り点を打つ

てしまふことがある。ただし、あくまでも学生に罪はないといふのが私見である。「かういふときには連読符号を附ける」などと場当たりな説明しか加へない教員こそ罰当たりなのだ。

まづ肝腎なのは、連読符号が「熟語ゆゑに附ける符号ではない」といふことである。現行の連読符号は、江戸時代の音合符や訓合符とはまるで性質が違ふ。つなげて読むべき漢字のあひだに漫然と引く短線ではない。では、何のために連読符号が用ゐられるのかと言へば、「つなげて読むべき漢字が、返り点によつて切断されてしまふとき、その切断を防ぐために附ける符号」なのである。これを明確にせず、連読符号は熟語に附けるものだと誤解が何となく醸成されると、必ず次のやうな連読符号を附ける学生が現れる。

天将<sub>下</sub>以<sub>三</sub>夫<sub>一</sub>子<sub>為</sub>木<sub>鐸</sub>

天<sub>将</sub>に夫<sub>子</sub>を以<sub>て</sub>木<sub>鐸</sub>と為<sub>さん</sub>とす

\*『論語』八倍

「〈夫子〉は熟語、〈木鐸〉も熟語。連読符号でつないで何が悪い？」といふわけだ。なまじひに連読符号を「熟語符号」と呼んだりすると、このやうな誤りが防げない。<sup>(5)</sup>むろん、正しい返り点は左のごとくである。

天将<sub>下</sub>以<sub>三</sub>夫<sub>子</sub>為<sub>中</sub>木<sub>鐸</sub><sub>上</sub>

次に肝腎なのは、連読符号が「絶対に省いてはいけない、符号である」といふことだ。通称『諸橋大漢和』すなはち諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店）が連読符号を付けてゐないことに義理立てする気なのか、連読符号を「省いてもよい」と記す参考書類が少なくない。しかし、連

読符号を平然と省いてゐるのは、ある程度の漢文の実力を読み手に期待できた今は昔の物語。すでに時は移り世は変はり、もはや令和の時代となつた以上、漢文の実力を当て込まれては、かへつて読者がいい迷惑だ。そもそも連読符号ナシでは、漢文の読み順を正確に指示することはできないのである。たとへば、次のやうな返り点が附いてゐたら、どう訓読するだらうか。

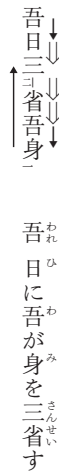
吾日<sub>三</sub>省<sub>吾</sub>身<sub>一</sub>

\*『論語』学而

返り点の指示に従へば、「吾<sub>日</sub>に省<sub>吾</sub>の身<sub>を</sub>三<sub>た</sub>び<sub>す</sub>」とでも訓読するしかあるまい。「省<sub>吾</sub>」は人名か、「三<sub>た</sub>び<sub>す</sub>」とは三度も省<sub>吾</sub>の身<sub>を</sub>案ずる意味かと思ひ惑ふことにならう。むろん、正しい訓読は「吾<sub>日</sub>に吾<sub>が</sub>身<sub>を</sub>三<sub>省</sub>す」である。「〈三省〉」の二字がつながつて見えないやうでは、君もまだまだだね」といふわけだ。しかし、返り点に律義に従つて読み誤つた者と、「三省」の字間に連読符号を附けることなく読み誤りをせせら笑ふ者とは、どちらの態度がまともだらうか。前者を生徒・学生に、後者を教師に置き換へてみれば、自づから結論は明らかだ。附けるべき連読符号を附けずに生徒・学生が読み誤るのを嘲笑ふ教師こそ卑怯千万、あたかも野球の隠し球のごとく連読符号を目にとまらぬやうに伏せるとは言語道断ではないか。一二点で「身」から「三」に返るまではよい。しかし、その「三」から「省」に下りるのは、返り点では絶対に指示できない。返り点はあくまで逆行ベクトルを喚起する符号であり、「三」から「省」に下りるにはどうしても順行ベクトルが必要だからである。つまり、連読符号は、返り点では指示できない読み順を指示すべく、返り点にとつて必要不可欠な補助符号なのだ。これを「省い

てもよい」と説明するのは、自由の狼藉、尾籠の沙汰、私の目には返り点・連読符号の基本機能をわきまへぬ横紙破りにしか映らない。もし連読符号の省略に言及するのであれば、「かつては連読符号を省くことも珍しくなかつたため、刊行年の古い辞典や参考書は、連読符号が省略されてゐる可能性を念頭に置いて用ゐねばならない」くらゐであらう。

では、右の例文に連読符号を加へて、ベクトルの考へを適用してみよう。



「吾日」は、順行ベクトルに従ふのみ。例によつて、逆行ベクトルの終点に当たる「三」は跳び越える。「省」も「三」に続けて読みたいので跳んで後回し。「吾身」は順行ベクトルどほりである。そして、返り点に従つて「身」から「三」に逆行ベクトルで返す。

問題は、その「三」から「省」に下りるところだ。まづは「三」も「省」も跳び越した以上、「三」から「省」への順行ベクトルは、虚ベクトルであつたはずである。けれども、実際には「三省」と読むのであるから、「三」から「省」への順行ベクトルは、実ベクトルでなければならぬ。そこで考へるべきは、連読符号の性質だ。

最も単純なのは、連読符号が返り点に対してUターンの機能を持つとの捉へ方だ。逆行ベクトルが「三」に達したところで、謂はば壁に当たつたボールのやうに跳ね返つて「省」に進むと考へるわけだ。肝要な部分だけ図示すれば、次のごとくである。作図の便宜上、Uターンは、もう一本の左傍直線を想定して示しておく。



けれども、右が甚だ拙い事態であることは明らかだらう。逆行ベクトルの跳ね返りを導入すると、左傍直線上に順行ベクトルが現れることになつてしまふからだ。左傍直線は、あくまで逆行ベクトルの専有領域としておきたい。

さうとなれば、残る捉へ方は一つに絞られるだらう。実の順行ベクトルが「三省」に要求される以上、いつたんは跳び越えた虚の順行ベクトルが、連読符号によつて実の順行ベクトルに変化すると考へればよい。ここで順行ベクトルを本位ベクトル、逆行ベクトルを臨時ベクトルとも名づけたことが生きてくる。音楽で言へば、連読符号は本位記号ナチュラールのごとき存在で、臨時ベクトルを本位ベクトルにもどす機能を持つと考へるわけだ。結果として、左のやうに図示できることとなる。



初めは虚であつた「三省」の順行ベクトルが、連読符号によつて実の順行ベクトルに変化するのである。当初は「三」も「省」も跳び越えた。「三」は、返り点の終点ゆゑに跳び越した。「省」は、連読符号が掛かつてゐるがゆゑに、言ひ換へれば「三」の関数であるがために、「三」を読まずして「省」に進むことはないと考へて跳び越したのだ。右に



「省」は「三」に続けて読みたいので跳んで後回し」と記したのは、そのやうな意味からである。謂はば「(三) 〓 嶷、つまり「三」なくして「省」の値は定まらない。連続符号で結ばれた以上、「三」は「省」を読むための絶対条件なのである。

## 六 連続符号の処理(2) 中継点

続けて連続符号の問題をもう一つ考へてみよう。それは連続符号の掛かつた語句が中継点となつて、さらに上へと返る場合だ。くだくだしい前口上は抜きにして、ただちに最も字数の少ない例文を挙げることにする。

患<sub>三</sub>所<sub>二</sub>以立<sub>一</sub> 立つ所以<sub>ヲ</sub>を患<sub>レ</sub>ふ \*『論語』里仁

まづ断つておかねばならないのは、右が漢文学における現行の返り点だといふことである。かつては「患<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>以立<sub>一</sub>」のやうな返り点が一般であつた。今なほ歴史学や古文書学などでは、かうしたレ点の使ひ方をしてゐる。けれども、現在はレ点の規定が嚴格になり、連続した二字の転倒以外にレ点は使はない。その規定に則れば「所」から「患」に返すことになるが、連続符号に従へば「所」の次には「以」に進まねばならない。要するに、「所」が股裂きになつてしまふわけだ。いつぞや、ある歴史学の専門家に訊ねたところ、「連続符号が掛かつた〈所以〉を一字と看做してレ点を打つ」との答であつた。けれども、これは強弁だらう。「所以」は、誰が見ても二字である。これを一字と看做すのは無理といふものだ。また、もし「所以」を一字と看做すのであれば、「患<sub>レ</sub>所

以立<sub>一</sub>」のごとき返り点になるはずだが、実際にはあくまで「患<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>以立<sub>一</sub>」のやうに打つてゐる。つまり、二点を付ける段階では「所以」を二字扱ひして連続符号を使つてゐながら、さらに「患」に返る段階で「所以」を一字と看做してゐることにならう。いつたい一字なのか二字なのか、「所以」の顔が立たないといふものだ。ここでは、右に掲げたやうに「患」には三点で返すものとして話を進める。

「立つ所以を」までは、第五節に記したとおり。「患」も「所」も返り点の終点ゆゑに跳び越える。「以」も「所」と連続符号でつながれてゐるので跳び越す。順行ベクトルがそのまま生きてゐる「立」から訓じ始めるわけだ。

問題は、「所以」を読み終へてから「患」に返す場面である。連続符号だけが附いてゐる「以」から「患」に返るのは、何によつて保証されてゐるのだろうか。これこそ連続符号の掛かつた語句が中継点となつてさらに上へと返る場合のややこしさだ。本位記号たる連続符号によつて「所」から「以」に下りるまではよい。しかし「以」に返り点はない。二点が附いてゐるのは、紛れもなく「所」である。「以」から三点「患」に返る跳躍力はどこから生まれるのだろうか。

往時には、やはりこのやうな場面が気になつたのであらう、「患<sub>下</sub>所<sub>二</sub>以立<sub>一</sub>」のごとき返り点も行はれてゐた。しかし、現行の返り点法では上下点はその内部に必ず二点を包含してゐなければ使へないことになつてゐる。今や一二点と上下点が交錯する「患<sub>下</sub>所<sub>二</sub>以立<sub>一</sub>」のやうな返り点は認められない。

ここで第五節の考察結果を想ひ起こしてみよう。当初は虚であつた「所以」の順行ベクトルが、本位記号たる連続符号によつて実ベクトルに変化した場面である。

患<sup>三</sup>所<sup>二</sup>以<sup>一</sup>立<sup>一</sup>

この段階で、読みは「以」まで進んでゐる。その返り点がない「以」から「患」へ返すには、どのやうに考へるべきだろうか。

想起すべきは、「所以」の実ベクトルが本来は虚ベクトルであつたといふことだ。つまり、連続符号といふ本位記号で一時的に実ベクトルになつたにすぎず、その効力が終はつた時点で、また虚ベクトルにもどると捉へればよいのではないか。要するに、返り点による逆行ベクトルは、一点「立」から二点「所」に返つたところで、いったん連続符号によつて逆行の動きを妨げられるものの、連続符号の作用が「以」において消失した時点で息を吹き返し、二点に次ぐ三点「患」に進むと考へるわけである。そのやうに捉へれば、「一↓二↓三」と逆行する動きは、そのまま生きることになるだらう。かうした結果を図示すれば、左のやうになる。

患<sup>三</sup>所<sup>二</sup>以<sup>一</sup>立<sup>一</sup>

「所以」に掛かつた順行の虚ベクトルが、連続符号といふ本位記号によつて実ベクトルとなり、その失効とともに再び虚ベクトルにもどると考へるのは、一見、煩瑣に思へるかもしれない。しかし、たとへばト長調 G dur の Fr. 音が本位記号  $\text{Fr}$  によつて一時的に  $\text{Fr}$  音となり、直後の小節で再び  $\text{Fr}$  音にもどるのと似たやうなものと捉へれば、決して複

雑な現象ではあるまい。その程度の臨時記号を厄介者扱ひしてゐては、たうていシヨパンのピアノ曲なぞ弾けないのである。返り点の逆行ベクトルにとつて、連続符号が示す順行ベクトルは、謂はば束の間の寄り道のごとき存在だ。

### 七 連続符号の処理 (3) 三字句・四字句

連続符号<sup>ハイフン</sup>には、なほ問題が残る。それは、右で観た「所以」のやうな二字句ではなく、さらに字数が増えて三字句・四字句に連続符号を用ゐる場合だ。

もつとも、三字句について加へて論ずべきことはない。単に三字を二つの連続符号でつなぐだけであるから、二字句の延長と考へれば事が済む。念のため一例を挙げておかう。いきなり三字句が中継点となる例をお目に掛ける。

夫庸知<sup>三</sup>其年之先<sup>二</sup>後<sup>一</sup>生於吾<sup>一</sup>乎  
夫れ庸ぞ其の年の吾より先後<sup>われ</sup>生なるを知らんや

\*〔唐〕韓愈「師説」

これにベクトルを加へて表示すれば――

夫庸知<sup>三</sup>其年之先<sup>二</sup>後<sup>一</sup>生於吾<sup>一</sup>乎

順行ベクトルに従つて「夫れ庸ぞ其の年の吾より」と下る。「於」は

置き字ゆゑに、「知」「先」は例によつて逆行ベクトルの終点ゆゑに跳び越えておく。そして、一点「吾」から二点「先」に返つたところで、連読符号で連結された「先後生」の順行虚ベクトルが実ベクトルに変化したと考へ、「先後生」三字を読む。さらに「生」に達した時点で連読符号が失効し、「先後生」の順行実ベクトルが虚ベクトルにもどる。そこで二点「先」から改めて逆行ベクトルに従つて三点「知」に返り、あとは順行ベクトルの押し下げ圧力によつて「乎」にたどりついて読み終はり——かう考へれば、二字句の場合とまつたく同じ、新たに付け加へることは何も無い。連読符号でつながれた「先後生」の順行ベクトルが「虚↓実↓虚」と変化する点さへわきまへてゐれば、返り点「一↓二↓三」の逆行ベクトルには何の乱れも生じないのである。

問題は、四字句の場合だ。なぜ問題になるのかと言へば、漢文学における現行の返り点法では、四字句について次のやうに返り点・連読符号を附けるものとされてゐるからだ。二点から三点へと下方に向かつてゐる点に注目していただきたい。甚だ違和感を覚える返り点である。

三司令五申之  
之に三令五申す \*『史記』孫子呉起列伝  
其畏惡嚴尊秦也明矣 其の秦を畏惡嚴尊するや明らかなり

\*『戦国策』魏二

右のごとき返り点が正当化される根拠は、何と今を去ること一世紀餘、明治四十五年（一九一二年）三月二十九日付《官報》第八六三〇号所載の文部省「漢文教授ニ関スル調査報告」〔返点法〕第三・例文（九）（十）が左のやうな返り点を示してゐたことにある。便宜上、書き下し文を添へておかう。

欲取捨酌之 之を取捨酌せんと欲す

未嘗不嘆息痛恨於桓靈也

未だ嘗て桓靈に嘆息痛恨せずんばあらざるなり

右の返り点を前提にして、今風に連読符号を附ければ、次のごとくになる。

欲取捨酌之

未嘗不嘆息痛恨於桓靈也

「取捨酌」「嘆息痛恨」のやうな四字句は、かうした返り点で処理するのが現行の方式だ。

けれども、右にも記したとおり、この方式には違和感を禁じ得まい。違和感の理由は二つある。一つは、何と言つても三点が二点の下方に位置することだ。返り点は、逆行ベクトルを指示する符号のはずである。右の方式では、それが「二↓三」の部分だけ順行ベクトルになつてしまふ。返り点の原則に違反してゐることは、誰の目にも明らかだらう。

按ずるに、未だ連読符号が漢文の読み順を示すべく必須の符号になつてゐなかつた明治四十五年（一九〇二年）の時点では、「漢文教授ニ関スル調査報告」が示したやうな返り点を附けるしかなかつたのであらう。しかし、連読符号が一般化した現今、返り点に順行ベクトルを指示させるがごとき珍妙な無理を犯す必要はあるまい。実際、歴史学・古文学などでは、左のやうな返り点のほうが目立つのである。

収蔵愛惜之

之を収蔵愛惜す

区処分置倭人

倭人を区処分置す

かうした方式のほうが、漢文学流の「収蔵愛惜之」「区処分置倭人」などよりも見た目がすつきりするうへ、何と言つても三点が二点の下方に現れる不自然さを避けることができる。ベクトルを持ち出して、二字句・三字句の場合に準じて無理なく説明できよう。つまりらぬ意地の張り合ひはやめ、この点に関するかぎり、漢文学は歴史学・古文書学の流儀に倣ふべきだらう。

もう一つは、右に掲げた例文のやうに、四字句が「三令五申」「畏悪+嚴尊」「取捨+斟酌」「嘆息+痛恨」または「収蔵+愛惜」「区処+分置」のごとく常に「二字+二字」に切れる保証はないといふことだ。「二字+二字」の語構成であればこそ、「三令五申之」「嘆息痛恨於桓靈」のやうな返り点が附けられる。しかし、さうでなければ、立ちどころに返り点に窮する事態になつてしまふ。「さう宣ふのであれば、「二字+二字」でない四字句に返す例を挙げてみる」と言ふかもしれない。けれども、例文を挙げるのに苦勞はしないのである。何を隠さう、『論語』に実例が見えるからだ。

有三年之愛於其父母乎

其の父母に三年の愛有るか

\*『論語』陽貨

下方の「其父母」から上方の四字句「三年之愛」に返つてゐる。この「三年之愛」を「二字+二字」すなはち「三年+之+愛」と捉へるのは無理だらう。修飾語「三年」が「之」を介して被修飾語「愛」に掛かつて

ゐるのであるから、「三年之+愛」あるいは「三年+之+愛」と切るこ  
とになる。敢へてそれぞれに従つて「三令五申之」流の返り点を打  
てば、左のやうにならう。

有<sup>四</sup>三<sup>三</sup>年<sup>一</sup>之<sup>三</sup>愛<sup>四</sup>於<sup>三</sup>其<sup>二</sup>父<sup>一</sup>母<sup>一</sup>乎

有<sup>五</sup>三<sup>三</sup>年<sup>一</sup>之<sup>三</sup>愛<sup>四</sup>於<sup>三</sup>其<sup>二</sup>父<sup>一</sup>母<sup>一</sup>乎

かうした繁雑な返り点を歓迎する向きは皆無に違ひない。となれば、  
やはり四字句は、三つの連続符号を連用してつないでおくに若くは莫し  
といふことになる。

有<sup>三</sup>三<sup>三</sup>年<sup>一</sup>之<sup>三</sup>愛<sup>四</sup>於<sup>三</sup>其<sup>二</sup>父<sup>一</sup>母<sup>一</sup>乎

要は、逆行ベクトル専用の左傍直線上に順行ベクトルを交へるやうな  
例外を許してはならないといふことである。例外は、少なければ少ない  
ほどよく、できれば一つもないのが理想だ。一百年以上も遡る「漢文教  
授ニ関スル調査報告」に義理立てして生死を共にする必要はあるまい。  
三点が二点の下方に位置する騙し討ちのごとき例外を設けて生徒・学生  
を困惑させたりするから、漢文は嫌はれてしまふのだ。

もつとも、右のごとく連続符号を用ゐるだけでは、語構成がわからな  
い点で不都合を来たすではないかと異を唱へる向きがあるかもしれない。  
実のところ、かつては私もさう考へてゐた。<sup>(10)</sup>しかし、この異議に対して  
は、二つの点で反論が可能である。

第一に、返り点の本身は、訓読の順序を明示することにあり、語構成  
を指示する役割は二の次であるといふことだ。<sup>(11)</sup>「二字+二字」の語構成

を示すために「三〇令五〇申之」のやうな例外措置を講ずる必要はあるまい。訓読の順序は「三〇令五〇申之」で十分に示すことができる。

第二に、どうしても語構成を示したければ、連読符号に少し工夫を加へるだけで事が済むはずだからである。語句の切れ目に相当する連読符号は、たとへば「三〇令五〇申之」のやうに二重ハイフンを用ゐるものと規定すればよい。このほうが二点の上方に位置するがごとき例外を設けるよりも遙かに簡明だと思ふが、果たして如何だらうか。右掲「三年之愛」は、修飾関係が明らかなので、わざわざ二重ハイフンを記すまでもないと思ふけれども。

## 八 まとめ

以上、つまらぬ思ひつきと言はればそれまでだが、現時点における私なりの〈返り点〓ベクトル理論〉である。漢文の右傍直線上に順行(本位)ベクトル領域を、左傍直線上に逆行(臨時)ベクトル領域を指定し、返り点の作用を逆行ベクトルと捉へれば、返り点にまつはる各種の現象が合理的に説明できるものと思へる。

とりわけ、第六節で論じた連読符号の掛かつた語句が中継点となつて、さらに上へと返る「患<sub>三〇</sub>所<sub>三〇</sub>以立<sub>三〇</sub>」(立つ所以を患ふ)のやうな場合には、連読符号に附く順行ベクトルの虚実の交替を以て説明するのが有効であらう。従来は「以」から「患」に返る読み順が今一つ明確に説明できなかった。<sup>(12)</sup>〈返り点〓ベクトル理論〉を以てすれば、順序どほり「一↓二↓三」と進むことが明快に説明できると思ふ。

また、第七節で述べたごとく、あらかじめ漢文の左傍直線を逆行ベクトルの専有領域と規定しておきさへすれば、「三〇令五〇申之」(之に三

れいごしん 令五申す)のやうな面妖そのものの返り点など容易に排斥できる。むしろ、漢文訓読にとつて、旧来の慣用を重んずることは重要に違ひない。どぎつく言へば、漢文訓読は、往時からの慣習だけで成り立つてゐる。しかし、どう見ても不合理な返り点を野放しにしておく手はあるまい。その是正に〈返り点〓ベクトル理論〉が貢献できれば、以て瞑すべしである。

第一節の冒頭に記したごとく、数学の専門家が我が拙い理論(と言へるかどうか)を洗練された理論へと磨き上げてくださることを切に望む。

### 【注】

- (1) ベクトルは、英語 vector ならば「ヴェクター」、ドイツ語 Vektor でも「ヴェクトル」と表記するのが本来であらうが、本稿では慣用に従つて「ベクトル」と記す。
- (2) 矢野健太郎「編」東京理科大学数学教育研究所「第2版増補編集」『数学小辞典』第2版増補(共立出版、二〇一七年)三二六頁右「スカラ」項、六二五頁左「ベクトル場」項。
- (3) 結句への続き具合から見れば、この転句の末尾は「欲すれば」と仮定に訓ずべきだが、ここでは返り点だけを考察の対象とするため、便宜上、終止形にしておく。なほ、「把」は「以・將」(以て・將て)と同義で、処置「比」(なぞらへる)意の対象を表すがゆゑに、「把」(把て)とも訓読できる。ただし、そのやうな訓読を許すと、「把」に助詞「を」を充てる「把西湖」(西湖を)のごとき訓法も許容せざるを得なくなるおそれがあるため、今は採らない。
- (4) 当該蘇詩の全字句は「水光激灑晴方好/山色空濛雨亦奇。欲把西湖比西子/淡粧濃抹総相宜」(水光 激灑として 晴れ方に好く/山色 空濛として 雨も亦た奇なり。西湖を把つて西子に比せんと欲すれば/淡粧 濃抹 総て相宜し)である。
- (5) 奥平卓『漢文の読み方』/岩波書店《岩波ジュニア新書》(一九八八年)一一頁に、連読符号を「熟語記号と呼んでおきましょう」とあるが、この命名は誤解を招く危険性大、たうてい賛成しかねる。
- (6) 拙論「柳橋新詠」の返り点(初稿)——幕末/明治初期の訓読をめぐる——/明星大学紀要【人文学部・日本文化学科】第22号(二〇一四年三月)一〜二五頁を参照。
- (7) 理論的には五字句・六字句……などもあり得るはずだが、実際には五字句以上の例

を見ない。中国語の律動感リズムから考ふるに、四字句が限界なのではないだろうか。もし五字句以上の例があれば、ぜひ御教示を請ふ。

なほ、以下の第七節は、二篇の旧稿すなはち拙論「三字句・四字句への返り点——〈附説〉『論語』陽貨「三年之愛」文の訓読について」／明星大学紀要【人文学部・日本文化学科】第20号（二〇一二年三月）三〜一四頁、および拙論「四字句への返り点再説——返り点に非ざる返り点を撤廃せよ」／同第25号（二〇一七年三月）一〜二二頁に多くを負ふ。本稿の字句は、当該二篇の内容を〈返り点〓ベクトル理論〉の立場から簡略に書き改めたものである。

(8) 村井章介「校注」宋希璟『老松堂日本行録』／岩波書店《岩波文庫》（一九八七年）二二九頁「老松宋先生日本行録序」／二五九頁『世宗実録』抄・6月13日条。

(9) 当該『論語』陽貨「三年之愛」については、注(7)所掲の拙論二篇のほか、拙論「〈三年之愛〉は続くのか切れるのか?——四字句への返り点と連続符号の措置」／全国漢文教育学会《新しい漢字漢文教育》第57号（二〇一三年十一月）九〜一七頁でも論じた。

(10) 拙共著『漢文訓読入門』／共著者〓湯城吉信、明治書院（二〇一一年）五四頁。

(11) これは右掲『漢文訓読入門』の共著者たる湯城吉信氏の御指摘によつて気づいたこと、何とも恥づかしいかぎりである。この場を借りて湯城氏に御礼を申し上げる。

(12) 拙著『これならわかる返り点——入門から応用まで』／新典社《新典社新書》（二〇〇九年）七八〜八一頁を参照。それなりに筋の通つた説明をしたつもりだが、〈返り点〓ベクトル理論〉の明快さには及ぶまい。

\*本稿の漢字は、常用字体を原則とした。